

AKAYA PROJECT

赤谷プロジェクト地域協議会 / (公財) 日本自然保護協会 / 林野庁関東森林管理局

赤谷の森だより

2021.8.1

vol. 47

赤谷の森でわかったこと

センサーカメラによる

哺乳類の長期モニタリング調査

(公財) 日本自然保護協会 生物多様性保全部 中野 恵

トピックス

● 地域と繋がる赤谷プロジェクト

元新治小学校教諭 石坂 克之

● 谷川岳インフォメーションセンターオープン

みなかみ町 観光商工課 観光振興係 鈴木 香理

(初夏の赤谷川 撮影: 赤谷森林ふれあい推進センター)

今回のテーマ

「赤谷の森の初夏を彩る花々」 (写真: 赤谷森林ふれあい推進センター)

AKAYA no MORI

ミニ写真館



アヤメ(6月上旬)



ミズキ(6月上旬)



ヤマツツジ(5月下旬)



フジ(5月下旬)



タニウツギ(6月上旬)

赤谷の森で わかったこと

センサーカメラによる 哺乳類の長期モニタリング調査

赤谷の森では、人工林の自然林への復元が森で暮らす哺乳類相に与える影響を調べるため、2008年からセンサーカメラを用いたモニタリング調査を行っています。現在、常時約80台のカメラが哺乳類の動きを見守っています。全国でも類を見ない長期モニタリング調査の結果から見えてきた最新の動きをお伝えします。

ツキノワグマ

森の健全性を示す指標といわれるツキノワグマの撮影頻度指数(100日あたりの出現頭数:RAI)は、わずかに増加傾向を示しています(図1)。この動向を見る限り、赤谷の森は良好な状態です。周辺にあたるみなかみ町新治地区の2008年(2019年の捕獲頭数は年平均約6頭で、最小値は2008年0頭、最大値は2016年17頭)と増減を繰り返しています。この間、ツキノワグマのRAI値に大きな変化が見られないことから、現在のところ、捕獲圧が森の中のツキノワグマ生息数に与えている影響はないと考えられます。

群馬県沼田地区のブナ科堅果の豊凶指数の推移を見ると、毎年豊凶を繰り返してきたブナ、ミズナラ等の豊凶サイクルが、2016年以降乱れています(図2)。センサーカメラ設置地点のうち、半径2km以内に建物数が多い5箇所(人家に近い)

と建物数が少ない5箇所(人家から遠い)とで撮影されたツキノワグマのRAI値を比較すると、特に2016年以降、ブナ、ミズナラ、コナラが不作の年に、人家に近いカメラでツキノワグマがよく撮影されることになりました(図3)。

ニホンジカ

赤谷の森のニホンジカのRAI値は、2008年10月11月と2019年の同時期とを比較すると約27倍に増加しています(図4)。かつての赤谷の森ではカモシカの方が主流で、ニホンジカは稀な存在でした。それが、2018年ごろを境に逆転し、ニホンジカは現在も増加傾向にあります。赤谷の森のニホンジカは、秋に多く出現します。性別を見ると

約半数が雄ですが、小出俣など雌や仔ジカの占める割合が比較的高いエリアもあります。最初にニホンジカが増え始めたのはこの小出俣エリアで、その後、南ヶ谷エリア、2017年ごろからは西部のムタコ沢付近でも増加傾向が見られ、現在では、標高1500m以上の高山帯を含

む、ほぼ全域で確認されるようになりました。

シカ対策の最前線

みなかみユネスコエコパーク(以下、BR)は、四方八方からニホンジカが移入し、シカ対策の最前線となっています。気候変動等の影響で

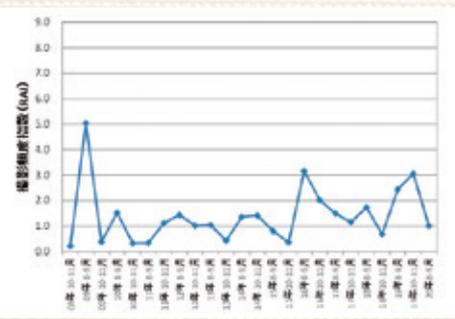


図1 赤谷の森で撮影されたツキノワグマの撮影頻度指数(RAI)

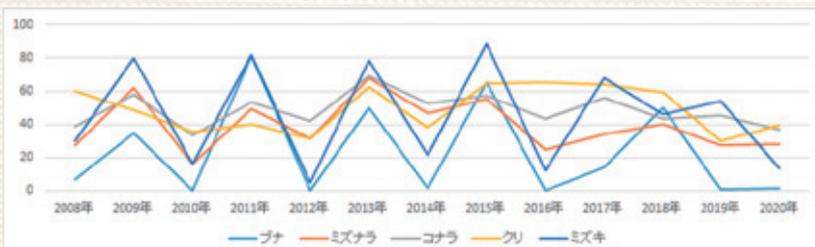


図2 群馬県利根沼田地域の豊凶指数の推移(2008年~2020年)
※群馬県自然環境課のデータをもとに作成

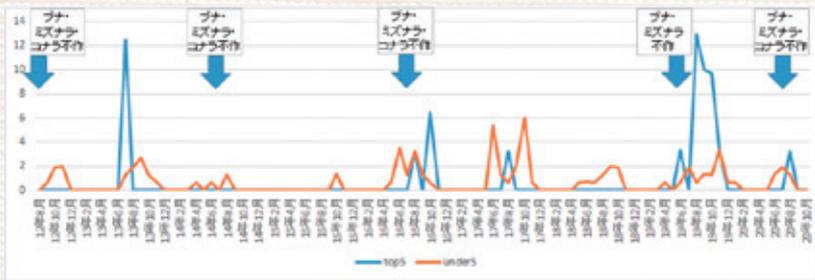


図3 定点カメラの半径2km以内に存在する建物数の上位5地点(top5)と下位5地点(under5)の月別RAI値の推移 青線は建物数の上位5地点、橙線は下位5地点を示す
※2020年10月は調査日までのデータを用いた

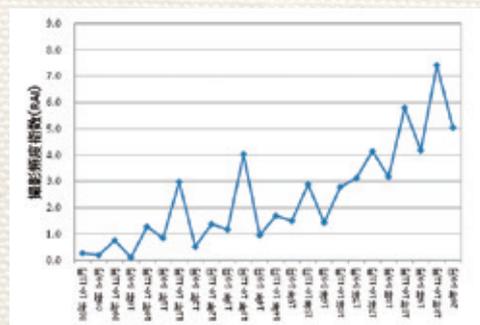


図4 赤谷の森で撮影されたニホンジカの撮影頻度指数(RAI)

冬の積雪量が減ると、越冬する個体数も増え、里山の希少種や赤谷の森など山奥の森林生態系にも影響が及ぶことが懸念されます。2019年からは、赤谷プロジェクトで行われてきた長期モニタリングの手法を活かし、みなかみBRの里地里山でも調査が始まりました。現在は、赤谷の森5箇所と、みなかみBRの里地3箇所、ニホンジカの低密度下における捕獲試験を実施しています。対策には、長期モニタリング調査から得る知見が欠かせません。これからも、センサーカメラとともに哺乳類の動向を見守り、豊かな森づくりのために調査を続けていきます。



公益財団法人日本自然保護協会
生物多様性保全部

なかの めぐみ
中野 恵

地域と繋がる

赤谷プロジェクト

元新治小学校教諭

いしざか かつゆき
石坂 克之さん



命をつなぐ授業

もし、あなたが明日、この世からいなくなるとしたら家族や多くの人たちに何を残しますか。「赤谷の森」は30年前、この世から消えかけました。水害を防ぎ、飲み水となり私たちの命を守り育てる「水源の森」は伐採されそうになりました。森の消滅を救った人たちの事を伝えなければと思い「新治村の自然を守る会」の岡村興太郎さんに新治小学校に来ていただいて6年「環境をまもる」の授業でお話をしてもらいました(写真1)。

1991年から1996年まで森に入り野生動物のモニタリングを大勢の人達がやったこと。そして絶滅危惧種のイヌワシやクマタカの生息・営巣・繁殖が確認され多くの協力者の強靱な忍耐と崇高な使命感によって「報告書」として提出され森の伐採が止まったこと。授業ではこの報告書を教科書にして6年児童が「多種の猛禽類」について調べて発表したり、昨年、巣立ったイヌワシの幼鳥に『ミライ』と名前をつけて発表したりしました(写真2)。岡村さんと日本自然保

護協会の出島誠一さんによるこの授業で「森を守る命のバトン」が、6年生の児童に引き継がれました。

その後、6年生は1年生との理科の合同授業で、「ドングリの種まき」を全員が行いました。自分たちが植えるドングリ種に名前(ニックネーム)をつけて、植木鉢に名札をさして水をあげました。6年生が1年生のために「赤谷の森のトトロの守り神」のコスチュームをつけて楽しませたり(写真3)、「赤谷の森の間伐材で作ったカスタネット」と「赤谷の森の間伐材で作った木琴」を用いて、全員で『どんぐりころころ』の曲を演奏して歌ったり、木を健康に育てるための「間伐」について1年生に分かりやすく説明したり、森の生き物とドングリと人間たちは「共生」して生きていることなどを易しく解説してくれました。<森を守る命のバトン>は、「ドングリ苗」へと姿を実体化して「緑色の生命体」となり、6年生から1年生へと引き継がれました。「名前がある苗」は、元気にのびのびと育て、赤谷の森に植樹されます。こうして豊かな水源の森が、永遠に続いていくことでしょう。



写真1: 岡村興太郎さんによるお話



写真2: イヌワシの幼鳥の名前の発表



写真3: 1年生と6年生の合同授業

Introduction

谷川岳インフォメーションセンター オープン!!

谷川岳周辺の歴史や文化を学んだり、自然環境を知ったり、植物などの最新情報も入手できるように谷川岳インフォメーションセンターが6月19日にオープンしました。

また、エコツーリズムの拠点施設として谷川岳エコツーリズム推進協議会が管理運営をしています。建物内のホールでは植物等の最新情報を入手したり、大きなベンチに座って休憩したりすることができます。冬には薪ストーブを囲んで休憩できます。常設のパネル展示は、谷川岳の植物や地質、動物を解説しています。このパネルは、赤谷プロジェクトから動植物の写真資料をいただくなどして、多くの専門の方々のご協力を得て作成さ

れました。パネルはインタープリターが解説することによって、周辺の動植物の理解を深めるほか、フィールド歩きをより楽しめるようにしています。そして、谷川岳の四季や登山コースを案内する映像を見たり、ラフティングやイヌワシ目線映像のVR体験をしたりできます。多目的室は、小・中学生の環境教育の場のほか県内外の小・中学生の野外学習の場として利用する予定です。谷川岳周辺を安全に楽しく過ごすためにぜひお立ち寄りください。

みなかみ町観光商工課 観光振興係
すずき かおり
主幹 鈴木 香理





色々な活動をしているよ!

赤谷プロジェクトの活動

トピックス



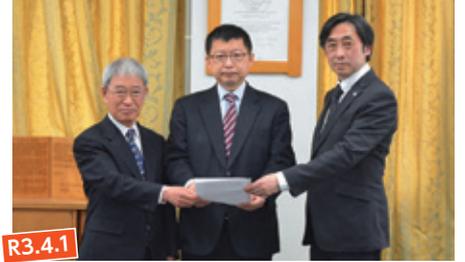
R3.2.16

関東森林管理局 森林・林業技術等交流発表会
Web開催となった発表会ですが、赤谷センターからは、「自然林復元試験」「イヌワシの狩り場創出試験」「ニホンジカの捕獲試験」について発表を行いました。



R3.2.19

みなかみ町赤谷プロジェクト連携会議
みなかみ町とプロジェクトの連携を深めるため、これまでの取り組みや今後の方針についての紹介と意見交換を行いました。



R3.4.1

協定の更新
令和3年4月1日付けをもって「[三国山地/赤谷川・生物多様性復元計画]」の推進のための協定書を更新しました。



R3.4.3

4月赤谷の日「ウサギの糞粒調査」
イヌワシの狩り場創出地においてイヌワシの重要な獲物となるウサギの生息状況を知るためにウサギの糞粒数の調査を行いました。



R3.4.20

クロサンショウウオの卵塊調査
南ヶ谷湿地におけるクロサンショウウオの生息状況を把握するために毎年実施している卵塊数の計測を昨年に引き続き行いました。



R3.6.1-30

ニホンジカの捕獲試験及び行動把握調査
ニホンジカの効果的な捕獲手法の確立と行動圏の把握を目的として、誘因による捕獲試験と捕獲した個体へのGPS首輪型発信機の装着を行いました。

着任のご挨拶

日本自然保護協会 (NACS-J)
生物多様性保全部

ただ ゆきこ
武田 裕希子



4月に着任し、5月からみなかみ町に移住して参りました。昨年度までは大学院生として、京都で環境教育や地域づくりについて研究していました。2019年8~11月にはNACS-Jのインターン生として赤谷プロジェクトに関わっており、帰ってきたような気持ちもあります。実はこれまでボランティアとして、インドネシアのボルネオ島やカナダの西部で、森林再生と地域づくりに取り組むNGOとともに活動した経験がございます。そこで出会ったNGOメンバーは、地域に住み、日々の暮らしを通して住民の方々とともに活動を展開していました。そんな姿を見て、「いつか自分も…」という憧れを密かに抱いていたので、今回みなかみ町に住んで赤谷プロジェクトを担当できることをとても嬉しく思っています。海外で見てき

たような、森林を守りながら多様な地域産業に繋げる取り組みは、日本ではまだまだ一般的でないように感じています。赤谷プロジェクトは、地道なモニタリングとその多様な視点に基づく管理が17年も継続されています。そこには、面白い事実や新しい地域産業のヒントがたくさん眠っていると感じています。今新しく進めているイヌワシ木材(イヌワシの狩場創出のために伐り出された木材)の地域内活用はそのひとつだと思います。これから様々な取り組みが生まれるように、皆さんと赤谷プロジェクトの架け橋を目指して全力を尽くします。学校や地域の活動にもどんどん参加していきたいと思っていますので、町で出会えたら、是非お気軽に声をかけていただければと思います。どうぞ宜しくお願いいたします!

赤谷プロジェクト、って?

赤谷プロジェクトは、人と自然の共生と持続可能な地域づくりをめざして活動しています。地域、自然保護団体、国有林管理者という立場の異なる三者が共に活動するという、全国的にもめずらしい取組です。

活動地域は、群馬県みなかみ町北部、新潟県との県境に広がる約1万 ha (10km四方)の国有林。ほぼ中央に赤谷川が流れることから「赤谷の森」と呼んでいます。

植物や生き物の調査・研究、環境教育、研修の受入れなど、活動はさまざま。毎月第一土曜日に行われる「赤谷の日」には、県内外のサポーターが調査や体験学習などを行っています。どなたでも参加できますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

※トピックスの詳細は

赤谷森林ふれあい推進センター

検索



赤谷プロジェクトサポーター募集! (たくさんの笑顔がまっています (^o^)/)



赤谷プロジェクトは、一緒に活動に加わっていただけるサポーターを募集しています。活動の中で研修の機会を豊富に用意しているため、自然や野外活動の知識や経験がないと心配される方も、学びつつ活動に参加できます。

■お問合せ先
(公財)日本自然保護協会：萩原

赤谷プロジェクトについて詳しく知りたい方はこちらをご覧ください。

林野庁関東森林管理局赤谷森林ふれあい推進センター

http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/kanto/akaya_fc/

この情報誌は、間伐材利用の紙を使用しています。

赤谷プロジェクト地域協議会

TEL 0278-25-8777

※「森のおもちゃの家」内

理事 本多 結

メールアドレス y-honda@takuminosato.or.jp

(公財)日本自然保護協会【NACS-J】

TEL 03-3553-4101

プロジェクト担当 萩原 正朗

メールアドレス akaya@nacsj.or.jp

林野庁関東森林管理局
赤谷森林ふれあい推進センター

TEL 0278-60-1272

所長 佐藤 健司

http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/kanto/akaya_fc/index.html
メールアドレス ks_akaya_postmaster@maff.go.jp